

---

# イベントキャリアの形成

## The Development of EVENT-CAREER

JEPC イベント総合研究所 上級研究員

大山 利 栄

東京富士大学キャリア開発センター 課長

Jepc Event general laboratory Senior Researcher Toshiei Ohyama

Tokyo Fuji University career Development Center Section chief

---

### .はじめに

東京富士大学の経営学部経営学科イベントプロデュースコース<sup>(1)</sup>では3年生39名、2年生21名、計60名の学生が「イベント」について体系的、実践的に学んでいる。<sup>(2)</sup>

なかでも単位科目としての「イベント現場実習」及び「イベント現場実習」はそれぞれ120時間に及ぶイベント現場での実習が義務付けられている。その指導教員として実際の各種イベントに学生を参加させることにより、多様な人々と共に業務を体験・実習させることで、学生はさまざまなポジションでイベントの持つ空気感を肌で感じることができている。

学生がイベントの現場に出る前段階として、第1に座学として社会人としての基本的なマナーや服装、身だしなみ、広告業界のことや美術施工、映像や音響、照明といったイベントを構成する様々な業種・業界などについての教育を実施している。

来場者(お客様)の立場としてイベントに参加するのではなく、イベントを作る側(制作者)の立場となってイベントに関わり、実際にステージの進行をし、来場者の対応や運営などを行うことで、従来には知りえない事前の準備の大切さや大変さ、現場での臨機応変な対応などをダイレクトに体験することが可能となっている。

イベント関連業界はもとより将来さまざまな就業機会に非常に有効な経験則を身につけることとなっている。

その意味では、「教育改革プログラム」(平成9年5月閣議決定)及び「教育改革プログラム」(平成9年1月文部省)において政府が積極的に推進しているインターンシップと趣を同じくし、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」の要件を十分に果たしているといえる。

大前研一(1988)は、「創作の才気を秘めた戦略家意識を、企業活動文化で作り出すことが大切になる」と述べている。そのためには、活動の中に若手の活動集団(大前は『サムライ集団』と呼んでいる)を編成する必要がある。それには、想像力と企業としての働きを機能させなければならない。結局、そのための準備活動は企業での「体験」ということになる。体験なしには革新的なアイデアを生み出す力も実践する力も備わることができない。イベントの現場実習は、このための効果的な実践力を有している。アメリカやヨーロッパでは一般的にインターンシップ制度をはじめ、企業や各種団体での現場実習を重視しているのはこの点にある。

### .背 景

イベントプロデュースコースの学生が参加したイベント「GHP祭 Music Film Festival 2012」は、主催は新宿区に拠点を置く「環境維新隊 東京ユネスコクラブ」という日本ユネスコ協会連盟の加盟団体で、「次世代への教育」をテーマに環境啓発、文化・スポーツ支援、被災地支援を3本柱に掲げ活動している<sup>(3)</sup>。

イベントタイトルとなる「GHP 祭 Music Film Festival 2012」のGHPとは、「ゴミが減るじゃんプロジェクト」の頭文字をとったもので、イベントを開催しながらもゴミを減らそうという生産活動としては一見矛盾しているとも言えるイベントタイトルであるが、そこが狙いの一つでもある。

また、若い世代をこの活動に巻き込むために、発表機会の少ない若手クリエイターに対する文化支援の一環として Music Film Festival をタイトルの一部としてイベントの核に持ってきたながら、昼間のステージでは音楽活動を行っている若手ミュージシャン、芸人、パフォーマンスグループなどの演奏機会、発表機会の創出をも行っている。このイベントの主たる目的は、ゴミを減らすためのシステムを社会に提案、無駄のない社会を形成すること。そして文化支援の名目でクリエイターを支援することである。

ユネスコ加盟団体ということで、イベントに関してはほとんどの参加者が素人であり、その多くはボランティアで構成されているところに特徴がある。

イベントの概要については「6W2H」で説明する<sup>(4)</sup>。

WHY(目的)

次世代へ向けた環境啓発、ゴミ削減、文化支援

WHO(誰が)

主催:環境維新隊 東京ユネスコクラブ

後援:日本ユネスコ協会/東京都/豊島区/としまユネスコ協会/としま NPO 推進協議会/東京富士大学イベントゼミ

TO HOW(誰に)

この活動に賛同する人、この活動を知って直接参加する人

WHEN(時期)

2012年10月20日(土)、21日(日)

WHERE(場所)

池袋西口公園

WHAT(内容)

・ステージプログラム

ミュージックフィルムフェスティバル、ステー

ジライブ(音楽、芸人、パフォーマンス)

・ニコニコ生放送でのネット完全生中継

・スポーツゴミ拾い

・環境啓蒙ブース展示

・飲食ブース

HOW TO(運営)

環境維新隊 東京ユネスコクラブの会員及び一般ボランティアスタッフで構成。

ゴミの元となるチラシは作成せず、WEB によるホームページ、Facebook を中心とした告知。飲食用の什器は全てリサイクル用のものとし、ゴミを出さない。

スポーツゴミ拾いを通して、会場から1km以内のゴミを拾う

HOW MUCH(予算)

300万円(想定)

会場、テント、テーブル、椅子などは豊島区の協力。映像機器、音響機器などは協賛メーカーより支給、もしくは実費のみ。

飲食ブースにおけるビール、ソフトドリンクの売上のみ主催団体の収益源となる。

イベントの主たるコンセプトである「次世代へ向けた環境啓発、ゴミ削減」については廃棄物削減ということで、飲食ブースにおいても使い捨て食器、紙コップ、プラスチック製コップ、ペットボトル、割り箸の使用を禁止。リユース食器のみ使用として会場内に洗い場を設置。ボランティアスタッフによって都度洗浄を行った。

このGHP祭は2009年にも同じ池袋西口公園で開催したが、その際は泉谷しげる氏のライブを中心としたコンサート色の強いイベントで、飲食ブースも4ブースと小規模な展開であったため、今回は格段に規模も大きく、全く新たなイベント展開を行ったといえるだろう。

.研究の目的

東京富士大学経学部イベントプロデュースコースの「イベント現場実習」及び「イベント現場実習」について、授業概要の中で「イベントを体験することで、職場や地域社会の中で多様な

人々と共に仕事を行っていくうえで必要な基礎的な能力「社会人基礎力」や仕事に対する「就業力」を高めることができる」とあり、また授業計画の中で4つのステップで実習を進める、とある。

ステップ :トータル運営システムの実習/イベントのアテンドマインド学習

ステップ :イベントの多面的な現場の見学・実習

ステップ :スポーツイベント現場の体験・実習

ステップ :イベント現場実習の総括

これまでイベントプロデュースコースの学生は音楽イベント「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」や「すみだ・ストリート・ジャズ・フェスティバル」、保護犬認知訴求イベント「ONE LOVE WALK」、本学の地元、高田馬場で開催される「BABA FEST」、また本学を会場として開催される児童虐待防止「オレンジリボン運動」PR イベントなど数々のイベント現場実習を行ってきた。しかし、イベント当日における運営面での参加が中心となっており、学校開催以外で企画段階より主催団体と共に会議に参加し、プランを検討し実行に向けて準備をしていく、いわゆる企画や制作進行といった作業を行う機会は少なかったのが現状であった。

そこで、今回「GHP 祭 Music Film Festival 2012」に参加するにあたり、学生の代表者を事前の企画(基本計画)段階から会議に参加させ、このイベントの意義や開催目的、スタッフの構成やイベントの運営システムなどを組み上げていく段階から関与し、実施に至るまでのプロセスを実体験として経験し、このイベントの把握度を他の学生よりも格段に上げることで、これまでのイベントへの関わり方との変化がどのように現れるのか、どの程度現場における実践力が向上するのか、またそのことによって他の学生たちへの影響はあるのか、またその学生たちの意識はどう変わるのかについて実体を把握する狙いがあった。

#### . 研究の方法

学生の代表として参加したK君の経緯を中心に追ってみる。

9月15日(土)18時~21時 環境維新隊 東

京ユネスコクラブ(以下環境維新隊)の理事会にて東京富士大学経営学部経営学科イベントプロデュースコースの学生のイベント現場実習スタッフとしての参加が正式に決まる。

この会議では、ステージや客席、展示ブース、飲食ブースなどの図面の検証、リサイクル食器の提示、リサイクル食器の洗浄方法の説明が行われた。また、運営マニュアルの必要性が説かれ、次回会議までにパートごとの担当分けを行うことが決定した。

9月28日(金) GHP ミーティング マニュアルの第一校を基に各パートの担当責任者、業務の大まかな内容、ステージプログラムの進捗状況等が話し合われた。

10月5日(金) GHP ミーティング 各パートの責任者が集まり、修正されたマニュアルでそれぞれの詳細が話し合われ具体的な手配方法、必要スタッフ人数の洗い出し、ニコニコ生放送との連動などについて話し合われた。

10月6日(土) 環境維新隊主催のバーベキューが板橋平和公園にて行われた。理事のほか、各メンバーたちとの交流ができ、他の学生会員とのコミュニケーションも取ることができた。またGHP 祭の根本にある「ゴミを減らす」という理念がバーベキューを通して理解することができ、一層イベントへの興味が深まった。また、このバーベキューには他にH君、T君の2名が参加。

10月8日(月) 環境維新隊の濱松理事長が本学に来校。イベントゼミ生全員に対して環境維新隊東京ユネスコクラブの理念や活動内容、GHP 祭の開催意義などについて説明を行った。

10月14日(日) 11時間にも及ぶ会議で、各パートの詳細の詰めを行った。東京富士大学イベントプロデュースコースの学生が分散して各パートのボランティアスタッフの中心として配置されることが決まり、K君についてはこれまでの会議への参加の過程からステージの進行、出演者周りの責任者の補佐という大役を任されることとなる。責任者となる人物は音楽関係の会社に従事し、出



演アーティストのブックキングも行うなどステージワークについてはプロである。

10月18日(木) 環境維新隊の事務所にて当日使用されるリサイクル食器の仕分け作業、備品の整理などを行った。なおこの作業にはKくんの他、イベントプロデュースコースの学生3名が手伝いとして自主的に参加した。

10月19日(金) 会場となる池袋西口公園にて、設営の作業に参加。ステージ上の機材設置を始め、音響、映像機材設置、テント、テーブル、椅子等の搬入、設置。のぼりや看板など各種装飾などの作業に従事。ステージプログラムについての現場での打ち合わせなど深夜までの作業となった。

10月20日(土) 本番初日。イベントプロデュースコースの学生が30名参加。K君以外のスタッフは場内整理、誘導、食器の洗浄、ビール販売ブースに分かれ業務についた。

K君については、開会式、スポーツゴミ拾い、6組のアーティスト、ミュージックフィルム上映など、めまぐるしく進行するステージプログラムの機材セッティングや出演者の取り回しなど、ステージ進行責任者の指示のもと作業を行った。また、1



日目の本番終了後、他の学生たちが解散した後もステージ担当者として全体ミーティングに参加。各パート担当者からの反省事項や修正事項などを共有し、2日目に備えた。

10月21日(日) 本番2日目。イベントプロデュースコースの学生は25名参加。K君以外のスタッフは場内整理、誘導、食器の洗浄、着ぐるみに分かれ業務についた。

K君については、前日同様、スポーツゴミ拾い、5組のアーティスト、ミュージックフィルム上映など、ステージプログラムの機材セッティングや出演者の取り回しなどを行い、さらに現場の状況に合わせて場内誘導から食器洗浄への学生の担当変更等の指示を出すようになった。本番終了後の撤去作業についても率先して学生達に指示を出し、テーブル、椅子、テントの撤去作業などを行った。

10月21日(月) 前日残った会場の撤去作業に参加。テントの解体、借りたものの返却などイベント終了後の大事な作業も経験した。

#### . 研究の考察

イベント学概論の中で小坂善治郎(2011)が言っているように、イベントを作っていく過程においては、「アイデア」「企画」「計画」「制作・施行」「実施運営」の各ステップできめ細かな構築が求められる。今回参加したイベント、GHP祭は2回目の開催ということで、「アイデア」「企画」については若干変更部分があるものの、考え方自体は前回の実施をほぼ踏襲している。しかし、実施規模の拡大ということもあり、内容については全く



別物として計画をしていかなければならなかった。

その「計画」段階から参画し、「制作・施行」「実施運営」まで主催団体と共に行うことにより、学生という立場でも主体性を持ってイベントに取り組むことができ、本番当日のみの現場スタッフとしての参加に比べるとはるかに実践力を伴ったスタッフとして機能することがわかった。

#### (1) 事前の会議からの出席で意識は格段に変化し、本番での行動へつながる

今回9月15日から会議に参加したK君の場合、9月15日の時点では何も分からずただ話を聞くに終始した。しかし、9月28日、10月5日と会議の回を重ねるごとにイベントの目的やそのためにやらなければならない事などが理解できるようになった。

徐々に自分たち、すなわち東京富士大学の学生がどのような立場で、何が求められているのかを悟るようになり、学生が関与するパートについては積極的に発言する姿が目についてきた。さらに10月6日の懇親バーベキューの場でも自ら焼く係りを担当するなど、まだ慣れぬ会員ともコミュニケーションを取れるようになることで、会員たちからも徐々に認知されるようになった。

さらに10月14日の会議になると、本来会員が担当すべき重要なパートの一つであるステージの進行担当に抜擢された。その打ち合わせの中では、主担当者が音楽業界の方であることから初めて耳にする単語や用語が頻出し、打ち合わせ当初は戸惑っていたようだが、徐々に慣れ、自分のすべきことについては理解しているようであった。また、



一般も含めたボランティアスタッフで構成される場内整理、誘導、食器洗い場の担当などに、20日もしくは21日のうち1日間のみの参加や時間がバラバラなボランティアスタッフがいても東京富士大学の2日通しで参加する学生をまんべんなく配置することで、オリエンテーションや指導ができると考え会議の中で提案。

本番当日においても2日間に渡り、与えられた職務のみならず、他の学生への指示を行うなど主催団体の会員に劣らない動きをしていた。

#### (2) 周りに対する影響

そもそも一人の学生をイベントの事前制作段階から関与したらどうなるのか、を実験的行ったのだが、その周りにいる学生たちも興味・関心を持ち、徐々に主催団体やイベントそのものの内容を理解し、積極的に参加しようとする姿が見受けられた。10月6日に行われたバーベキューで、H君、T君が参加してきたのを始め、10月18日の直前に行われた環境維新隊の事務所での事前準備では、4名もの学生がK君と共に業務を行い、作業を通してイベントの運営内容の理解に努めた。

#### 今後の課題

東京富士大学で来年度(13年度)から開講となる、イベントプロデュース学科では、要請する人材像を次のように定めている。

現代的なイベント論を体系的に学ぶとともに、実社会でのイベント現場実習により、新技術の習得やオペレーションの実際を体験することで育成される、実践力を持った人材。



(1) イベント現場で求められる、基本的な社会的ルール・マナー、態度・行動のあり方を身につけたうえで、人と人との関係性良好なコミュニケーションの取れる人材。

(2) 専門的な技術と知識を持った専門職業者のチームの中で、プロジェクトリーダーとして率先して働くことができる、リーダーシップある人材

次世代のイベントを担う、専門性と社会性を併せ持った「就業力」ある人材である。

今回実習に参加した学生はイベントプロデュースコースの学生であり、来年度から始まるイベントプロデュース学科とは少しばかりカリキュラムが違うが、目指すところは同じである。

「授業」という枠の中では、実際にクライアントのもとで、ある限られた、もしくは決められた予算でイベントを受注し、企画し、制作し、本番を実施するということはできないが、それらを学問として教え、考えさせ、そして現場実習で確認するということはできる。しかし、イベントへの関与の有り様とその労働を対価として得るイベント会社の社員でもなくアルバイトでもない、ましてや自発的に無償協力するボランティアでもなく、あくまで授業としてイベントに制作者側もしくはスタッフとして参加するため、そのモチベーションの維持には注力していかなければならない。その参考として今回の事例は大いなるヒントとなった。

今回参加した GHP 祭の来年度の開催はもちろんのこと、「すみだ・ストリート・ジャズ・フェスティバル」、「ONE LOVE WALK」など毎年開催が予想されるイベントについては、本番当日だけの現場



実習ではなく、数名ずつを事前の企画・制作作業からプロジェクトに参加させてもらい、それぞれ主体性を持った形でイベントに関与し、本番当日までをひとつの現場実習として捉え評価していく仕組みづくりを考えていきたい。

#### 【注】

- (1) 東京富士大学経営学部経営学科イベントプロデュースコースは日本で初めてイベントの理論と実践を体系的に学べる大学として 2013 年より新設される「イベントプロデュース学科」の前段階として 2010 年に設置された。
- (2) イベントプロデュースコースの学生は小坂善治郎教授、岡星竜美教授の専門演習ゼミに分かれて活動している
- (3) 環境維新隊東京ユネスコクラブ(理事長濱松敏廣)は 2008 年東京都認証 NPO 法人 環境維新隊として次世代の教育(=ESD)を掲げ、中でも大人を中心としたモラルアップを目的に活動している団体で、その活動実績が(公社)日本ユネスコ協会連盟に認められ、2011 年 9 月にユネスコ連盟に加盟
- (4) 一般社団法人 日本イベントプロデュース協会(JEPC)が保有するイベント企画の基本要素(JEPC イベント総合研究所が主管)

#### 【参考文献】

- ・Olson, M. “The Logic of Collective Action” Harvard University Press, 1965 (依田博・森脇俊雄訳(1983)「集団行為論」ミネルバ書房)
- ・今井賢一・金子郁容(1988)「ネットワーク組織論」岩波書店
- ・大前研一(1988)「The Mind of the Strategist」プレジデント社
- ・小坂善治郎(2002)「大学とまちづくり」みやざき 21 戦略財団
- ・小坂善治郎(2011)「イベント学概論」(JEPC 総研選書)リベルタス・クレオ
- ・南弘(1980)「人間行動学」岩波書店